

趣旨説明と TEM の概説

安田裕子

(立命館大学衣笠総合研究機構)

廣瀬眞理子

(関西学院大学大学院文学研究科)

廣瀬眞理子

企画趣旨を簡単に説明させていただきます。人間は常に外部と影響しあっている開放系で、個人システムは家族システムに埋め込まれ、家族システムは何らかの集団、あるいはコミュニティ、社会システムの中に埋め込まれています。また個人システムは家族システムとは別の位相で何らかの集団システムにも属していると考えられます。

複線径路・等至性モデル (TEM) は、人間の発達と人生径路の多様性と複雑性を捉え描き出す質的研究法です。その特徴としては人間を開放システムとして捉えるシステム論に依拠する点、また、時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点にあります。このワークショップでは時間とともにある人の発達的変容や人生選択の有様を、TEM を用いてシステムとしてどのように描くことができるかに焦点を当てて、4名 の話題提供者に報告をいただきます。そして人の変容をシステムとして捉えることによって、どのようなことが見えてくるかについて、フロアの皆様とお話をしていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。司会は安田裕子先生にお願ひいたします。

安田裕子

立命館大学の安田と申します。まず、TEM の諸概念を説明させていただきます。TEM は Trajectory Equifinality Model の略称です。「複線径路・等至性モデル」といい、人の径路を時間とともに描くための質的研究の方法論です。TEM の特徴は、重要ですので繰り返しますが、人間を開放システムと捉えるシステム論 (Bertalanffy, 1968/1973) に依拠する点、時間を捨象して外在的

に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する点の2点にあります。「等至性 (Equifinality)」の概念が鍵であり、発達や文化的な事象に関する心理学的研究に、等至性の概念を取り組もうとしたヤーン・ヴァルシナー先生 (2001) の創案に基づいています。人の選択や歩む径路は、決して単線ではなく、多様であり複線的であるでしょう。それでは、そうした多様性・複線性をどのようにして捉えていくことができるのでしょうか。もちろん、多様といっても、どこまでも末広がり的に多様なものではありません。歴史的・文化的・社会的な文脈の影響を受けるなかで、収束していくポイントがあるのです。そのポイントを、個人が多様な径路を歩みながらも等しく (equi) 至る (final) 点という意味を込めて「等至点 (Equifinality Point : EFP)」と概念化しました。「等至点 (EFP)」は、「等至性 (Equifinality)」の具体的な顕在型です。他にも、現象を捉えるために必要であると考えられた概念をいくつかつくりながら、質的研究法としてこのモデルを精緻化してきました。TEM の最小単位を描いたものが図1です。

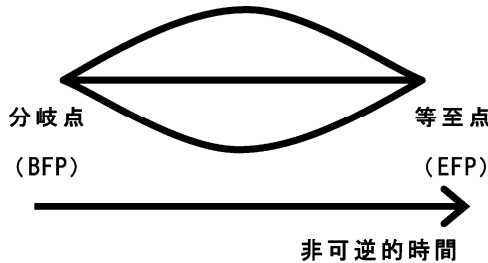


図1 TEM 図の最小単位
(安田・サトウ, 2012 より)

図1について説明します。決して後戻りしない時間の流れを矢印 (→) で示し、「非可逆的時間 (Irreversible Time)」としています。そうした時間の流れのなかで生じる、径路が分かれゆくポイントを「分岐点 (Bifurcation Point : BFP)」と概念化しています。他方、なんらかの文化的・社会的な諸力の影響を受けるなかで、収束してゆくポイントがあり、それが上述の等至点 (EFP) です。そして、「分岐点 (BFP)」と「等至点 (EFP)」の間には、径路が複線あり、それを「複線径路 (Trajectories)」としました。これらが TEM のごく基礎的な概念でして、TEM の最小単位はこれらの概念で構成されています。

他にもいくつかの概念が生成されていますが、まずこれらの概念を覚えていただきたいと思います。

実際に研究をするうえでは、「等至点 (EFP)」に至るまでの選択や経路のプロセスを捉えるために、まず、「等至点 (EFP)」を設定するとよいでしょう。「等至点 (EFP)」は、研究目的に応じて、何らかの出来事や行動や選択に焦点があてられることとなります。たとえば、「子どもが授からず不妊治療をしていた女性が、治療をやめるに至るプロセス」を捉えるという研究目的においては、「不妊治療をやめる」経験が「等至点 (EFP)」となります。こうした、ある経験（をした人）を研究の対象として焦点をあてる（抽出する）ことを、「歴史的構造化サンプリング (Historically Structured Sampling : HSS)」といいます。

「分岐点 (BFP)」は、経路が分岐していく際の、そのポイントのことをいいます。「分岐点 (BFP)」は、既にそこにあるものでも固定的なものでもなく、人が非可逆的な時間とともに生きるなかで生じるポイントです。そこには、非可逆的な時間が必ず流れているのです。一分一秒を刻むという言い方がありますが、そうした時計で計測できるクロックタイムではなく、人のライフ（生命・生活・人生）とともにある時間として概念化しています。こうした時間の流れのなかで、それまでの有り様が分かれてゆくわけですから、「分岐点 (BFP)」は、人の行動や経験が変容したポイントとみなすことができます。歴史的・文化的・社会的な諸力の影響を受けるなかで、「分岐点 (BFP)」に実際にどのような力がかかっているのかということ进行分析してもおもしろいでしょう。たとえば、女性に化粧をさせるような文化的・社会的な価値意識がある、という見方ができます。また、女性の結婚適齢期に関して「クリスマスケーキ」という比喩表現があったように、女性が24歳までに結婚しなければ売れ残りと言われる価値が社会に広がっていた時代がありました。そうした個人の行動や選択に抑制的にかかっていく文化的・社会的な諸力を、「社会的方向づけ (Social Direction : SD)」として概念化しています。他方で、ある行動や選択を後押ししたり促したりするような援助的な力もあるでしょう。それを、「社会的ガイド (Social Guidance : SG)」と概念化しました。1つのポイントに、抑制的な「社会的方向づけ (SD)」と助けとなる「社会的ガイド (SG)」がかかり、その2つの力がせめぎあうわけですが、「社会的ガイド (SG)」が大きい場合は「等至点 (EFP)」に近づき、「社会的方向づけ (SD)」が大きい場合には「等

至点（EFP）」から離れていく有り様として、径路が描かれることとなります。このように、次の道が開かれていくとともに分岐点（BFP）のような変容のポイントが発生すると考えるのです。その変容ポイントを捉えることもまた重要であり、そうした様相を捉えるモデルとして、「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：TLMG）」を提唱しています。

他には、必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP）という概念があります。もともとは地理的な概念で、ある場所に到達するために必ず通らなくては行けないポイントという意味でして、TEMにも取り入れています。ほとんどの人が通ると考えられるポイントとして概念化しています。基本的には自由なはずの行動や選択が、ある一定のところにと束縛されていく有り様として捉えられるポイントです。必須通過点（OPP）から径路が分岐することもあります。分岐点（BFP）として描くのか必須通過点（OPP）として描くのかは、研究者がどんなことを描き出したいか、あるいは強調したいか、ということによります。

こうしたさまざまな概念を適宜用いて径路を描いていくわけですが、ただ、データからは捉えられないことや、存在するはずなのになぜか見えにくくなっていることなどもあるかもしれません。ある1つの状態に辿り着くための選択肢や径路は複数あるでしょうが、歴史的・文化的・社会的な文脈に埋め込まれているために、なにがしかが見えなくなってしまうのであれば、それらを積極的に可視化していくことはとても重要なことであると考えます。そうしたあり得る径路を、TEM図上で、点線で描いていくのです。現象を捉えるなかで、あるいは、研究目的に応じて、可視化することに意味があると考えられる選択や径路を描き出すことが目指されます。

「等至点（EFP）」の逆の事象を描いておくことも重要であり、それを、「両極化した等至点（Polarized EFP：P-EFP）」として概念化しています。「両極化した等至点（P-EFP）」は、「等至点（EFP）」とは価値的に相反するポイントとして描かれます。「両極化した等至点（P-EFP）」の設定には、「等至点（EFP）」として焦点化した行動や選択への絶対的な価値づけを相対化するという意味があります。「等至点（EFP）」として、たとえば「不妊治療をやめる」「化粧をする」「普通の結婚をする」などの行動や選択を焦点化した途端に、そうあるべきだという価値が独り歩きしてしまうことがあります。そうしたことを防ぎ、また、反対事象を可視化することにより、当事者経験の多様な有り様

を担保することができる、という効果もあります。「両極化した等至点 (P-EFP)」を設定することによって、研究者自身に、多様な径路を捉えようとする姿勢が培われる、という効用もあります。

最後に、「複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA)」について述べておきたいと思います。「複線径路・等至性アプローチ (TEA)」とは、「複線径路・等至性モデル (TEM)」と「歴史的構造化サンプリング (HSS)」と「発生の三層モデル (TLMG)」の3つのアプローチを統合したものです。「複線径路・等至性モデル (TEM)」という、時間的プロセスを捉え描き出すためのモデルが中心にあり、歴史的・文化的・社会的な諸力の影響を受け結節化されたポイント (等至点: EFP) を研究の対象として設定する「歴史的構造化サンプリング (HSS)」というサンプリングの方法論があり、そして、分岐するポイントでなにかが起きているその変容のメカニズムを捉えるためのモデル「発生の三層モデル (TLMG)」がある、という構成になっています。つまり、「歴史的構造化サンプリング (HSS)」によって「等至点 (EFP)」を焦点化し、「発生の三層モデル (TLMG)」によって「分岐点 (BFP)」で何が起きているのかを捉え、そして、「複線径路・等至性モデル (TEM)」の枠組みで径路のプロセスを描く、という関係になります (図2)。このように、歴史的・文化的・社会的な背景文脈に埋め込まれているなかで、独立した単体としてではなく、システムとして変容・維持しながら生きる人のライフの有り様を、時間とともに捉えるための質的研究の方法論を開発しています。

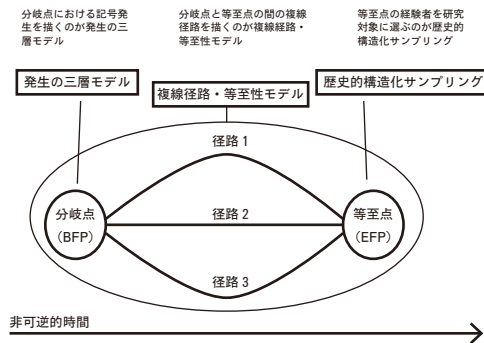


図2 TEM, HSS, TLMGの統合としてのTEA (複線径路・等至性アプローチ)
(安田・サトウ, 2012 より)

TEMに関する著書はこれまでに2つ刊行されています。1冊目は2009年に、そして2冊目は2012年8月末に出版されました。これまで、各研究者がそれぞれに関心をもっている現象に関し、TEMを用いてどのように分析できるかを議論する研究会を積み重ねてきました。本ワークショップは、そうした議論の蓄積と深まり、ネットワークの広がりのなかで、生まれたものであることを申し添えておきたいと思います。

話題提供者は、番田先生、和田先生、廣瀬先生、長坂先生です。順にご発表いただきます。そしてその後に、フロアのみなさまとディスカッションし、最後にサトウタツヤ先生にまとめをしていただく、という流れで進めていきます。それでは、番田先生から話題提供をお願いいたします。

【引用文献】

- Bertalanffy, L. von (1968). *General System Theory: Foundations, Development, Applications*. New York: G. Braziller. (ベルタランフィ, L.フォン. 長野敬・太田邦昌 (訳) (1973). 一般システム理論—その基礎・発展・応用. みすず書房)
- サトウタツヤ (編). (2009). *TEM ではじめる質的研究*. 誠信書房.
- Valsiner, J. (2001). *Comparative study of human cultural development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編). (2012). *TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開*. 誠信書房.